

# 青年期における未来展望と適応

## —期待理論によるアプローチ—

Future time perspective and social adjustment in adolescence.

杉 山 成

これまで時間的展望 (time perspective) として検討されてきた対象には、時間の主観的感覚に関わる概念から、人生設計のようなプランニング過程に関わる概念まで多様なものがあるが、Nuttin & Lens (1985) は、そうした時間的展望研究を、狭義の時間的展望 (time perspective: extension, density, 構成の程度等の側面)、時間的態度 (time attitude: 個人の過去・現在・未来に対するポジティブ・ネガティブな態度)、時間的志向性 (time orientation: 個人の思考、行動の優先的な方向性) という3つの領域に整理している。

Lewin (1942; 1951) が、個人の生活空間を未来や過去をも含むものとしてとらえ、個人の粘り強さ、集団のモラル、およびリーダーシップなどが時間的展望のあり方に強く依存していることを指摘して以後、extensionの発達的变化の検討や、時間的展望の各側面と各種の個人変数や適応変数との相関的な検討といった研究が行われてきた。例えば、個人変数に関する研究でいえば、満足の遅延 (Mischel & Metzner, 1962)、顕在不安 (Robertson, 1978)、独断主義 (Rokeach & Bonier, 1960) 等、一方、適応 (不適応) に関わる変数では、人生満足感 (Lessing, 1968)、学業成績 (Teahan, 1958; Lessing, 1968)、非行 (Barndt & Johnson, 1955)、身体部・心理的健康 (la Roche & Frankel, 1986) といった領域との関連性が確認されている。

しかし、こうした個人変数や適応変数との関連

性の検討のほとんどでは、扱われている変数が時間的展望の先行要因なのか、それとも時間的展望が現在に影響を及ぼした結果なのかといった因果的な関係については明確に言及されておらず、単に相関的な関連性が述べられているにすぎない。このように、時間的展望という概念は適応状態や行動を説明する変数として概念化されたにも関わらず、その関心は発達的な変化や他の変数との相関的な関係にのみ向けられ、それが現在の行動や適応に「どのように」影響を与えるのかという側面はネグレクトされてきた。そのため、現在までの研究では、時間的展望が現在の行動や適応に影響を及ぼすメカニズムを説明しているとは言えず (e. g. 小宮山, 1973; Lens, 1986)、上述のように未来展望のあり方と不適応との関連が示されても、時間的展望研究の側からそれに対する有効な示唆を与えることが困難であるといえる。

こうした点について Lessing (1972) は、純粋に認知的な未来展望と、実際に行動を動機づけた調整する未来展望を区別する必要性を主張しているが、今後の時間的展望研究には、単に1変数と1変数の間の相関関係のみを検討するだけでなく、人間行動の説明概念としての理論展開を図り、そしてその上での実証研究を重ねていくことが急務であると考えられる。

そこで本稿では、現在の活動や適応に影響を与え得る未来展望を「動機づけ的未来展望 (motivational future time perspective)」(注1) と呼び、

その性質や構造についての理論的考察を行い、先述のような問題意識に基づき、先行要因によって動機づけの未来展望が影響を受け、さらに動機づけの未来展望が現在の活動に影響を与える、というモデルを構成することを目的とする。

また、その理論的な背景は、モチベーション心理学における「期待理論 (expectancy theory)」に求める。多くの心理学の説明概念が過去や現在という時間の特徴を持つのに対し、期待 (expectancy) は、現在から未来へのベクトルを明確に示す数少ない概念であり、未来展望の形成や機能は、こうした期待という認知構造に関わる部分が大きいと推測される (e.g. 杉山, 1994b; 杉山, 1995)。

### 未来展望における「期待」的側面

**Atkinson の期待一価値モデル** 期待理論の源流は Tolman の「人の行動への意欲は、その行動がある特定の結果に結びつくであろうという個人の認知的な推測、そしてその結果の持つ魅力性の 2 点から分析できる」とした著述にみることができ。この考え方は Lewin のトポロジー心理学や以下に述べる Atkinson の期待一価値モデルによって、モチベーションに関する認知的モデルとしてとりいれられた。

Atkinson (1964) は、risk taking behavior と達成のモチベーションの関係に焦点を置くことによって、いわゆる Atkinson モデルを開発した。それによれば、人が目標を設定しそれを実行しようというとき、その成功接近傾向 ( $T_s$ ) は、成功したい動機 ( $M_s$ )、成功に対する主観的確率 ( $P_s$ )、誘因 ( $I_s$ ) の積によって示されることになる。成功したい動機 ( $M_s$ ) については個人差要因とされるが、 $P_s$  と  $I_s$  に関しては、 $P_s + I_s = 1$  という補数関係を仮定している。また、全体的な達成志向傾向は、上述の成功接近傾向の他に、課題の失敗を恐れ課題から回避しようという失敗回避傾向 ( $T_{-f}$ ) との合成力により以下のように示される。

$$T_s + T_{-f} = (M_s \times P_s \times I_s) + (M_{AF} \times P_{AF} \times I_{AF})$$

Lewin (1948) は、個人が目標に達し得ると感じる場合は、行動が未来志向的になり、目標が到達不可能であると感じる場合には、現在志向的になると主張している。また、個人のモラル (進んで努力を払おうとするかどうか) がこうした目標達成への期待に支えられていると述べている。いずれにしても、こうした目標の達成への期待が、未来展望の構成において非常に中心的な役割を持つであろうことは疑いない。

**道具性の認知** Atkinson モデルが示された後、それを検証しようとしたいくつかの研究において、現在の達成行動が即時的成功に留まらず、遠い未来的成功のための道具 (instrument) と認知されるときに、達成と関連した動機の特徴的な効果が顕著にあらわれることが示唆された。

まず、Isaacson & Raynor (1966) は、道具性の認知 (perceived instrumentality) と学業成績の関係を調べた。その結果、知覚された道具性が高くなるにつれて抑制不安の低い個人は高い成績を示し、抑制不安の高い個人は低い成績を示す傾向があった。

Raynor (1970) では、大学生を対象に、学期の初めに受講科目 (心理学) の成績が未来の職業的成功にとってどの程度有効であり、重要であるかを自己評定させた。また、履修科目をリストアップさせ、未来の職業計画のために各科目の成績がどの程度重要であるかを評定させた。その結果、未来の職業的成功のために受講科目に高い道具性を評定した場合に道具的価値を認めない場合よりも有意に優れた学業成績を得るという結果を見いだした。Raynor, Atkinson & Brown (1974) もまた、心理学コースの最終試験に直面した男子大学生の主観的反応を調べ、自己記述に表明された動機づけの強さは、試験の成績を未来の目標と結び付けるか否かの関数であることを確認している。

**Raynor の未来志向モデル** しかし、従来の Atkinson モデルではそうした現象の説明ができ

なかったため、Raynor (1969) は、Atkinson の期待—価値モデルに、未来の影響性を導入し、「未来志向モデル」を提唱した。Raynor は達成行動を、現在の活動が未来の目標達成への可能性へと導かれる行動と考え、そこにいくつかのステップから成立する一連の径路 (path) を想定した。その一連の過程であるステップは、その時点での活動を示すと同時に、さらに次のステップの期待も内包している。従ってそのモデルは以下のようになる。

$$T_{sn} = M_S \times P_{1sn} \times I_{sn}$$

$T_{sn}$  は一連の過程でのステップの一般項を示している。 $M_S$  は達成動機、 $P_{1sn}$  は、未来の成功の主観的確率、 $I_{sn}$  は誘因価である。一連の過程が  $N$  ステップあるとすれば、 $T_S = T_{s1} + T_{s2} + \dots + T_{sn} + \dots + T_{sN}$  となる。失敗回避 ( $T_{-fn}$ ) の動機づけモデルも同様であるため、未来志向の合成達成動機づけは、

$$T_{sn} + T_{-fn} = (M_S - M_{AF}) \sum_{n=1}^N (P_{1sn} \times I_{sn})$$

という公式で表されることになる (注2)。

さて、Raynor (1969) は、この径路に関して基本的に2つの事態を区別している。ひとつは future orientation (注3) が合成達成動機づけの強さに影響を与える事態で、随判径路と呼ばれる。この径路は即時的成功が未来の成功を得る機会を保証し、即時的な失敗は未来の失敗を意味する。もうひとつは future orientation が合成達成動機づけの強さに影響を与えない事態で、非随判径路と呼ばれる。これは先行の成功・失敗が後続の活動の機会と関連がない径路であるため、即時的成功や失敗が未来の成果と関連がない。

Raynor 理論は、このうち随判径路における即時的な合成達成動機づけの強さを予期するために提出された理論である (伊藤, 1987)。個人が現在の活動が後続の諸活動に対して随伴的であると知覚するならば、より多くの展望を持ってい

る方がステップが多く、その活動への影響性は高いことになる。一方、現在の活動の随伴性が知覚されない場合には、未来展望のあり方は現在の活動に影響を与えない。この理論からは、未来展望の行動調整効果が現在の活動と未来の活動や成果との道具的關係に関連し、現在の活動と後続の活動が随判性や道具性の認知という概念によって連結されている限りにおいて、未来展望が現在に影響力を持つということが推測される。

### 未来展望における「価値」的側面

**未来に対する感情的態度** 上述のような目標達成の期待や道具性の認知が未来展望における「期待」の側面であるならば、未来に対する時間的態度である「個人的未来に対する感情的態度 (affective attitude towards the personal future)」は、未来展望における「価値」と関連するものとして考えられる。一般にこの変数はSD法により、1次元的な態度として測定されることが多く、本邦でも都筑 (1993) や杉山 (1994a) がSD法による調査を行った結果、1次元構造を成すことを確認している。こうした未来に対する態度は、個人的目標に対するモチベーションの高さ (表谷, 1994) や、対他者関与の高さ (白井, 1985) と関連を持ち、精神的健康や健全なパーソナリティと関係する未来展望の次元とされる (南・光富, 1990)。

この未来への感情的態度の動機づけの意味について Van Calster, Lens & Nuttin (1987) は、以下のように Vroom (1964) の EIV モデル (expectancy Instrumentality Valence model) によって解釈することを試みている。

EIV モデルは、下式のように、ある活動 ( $i$ ) への動機づけの強さ ( $F_i$ ) を、その活動によって特定の成果 ( $j$ ) をどの程度獲得できるかという、活動—成果の連合関係に関する主観的確率 (期待;  $E_{ij}$ ) と、その成果の誘意性 ( $V_j$ ) の積の代数和として計算する。そして、この成果の誘意性 ( $V_j$ ) は、その第1次の成果によって得ることができる高次のすべての成果に関する誘意性 ( $V_K$ ) と、第

1次の成果（ $j$ ）の、より高次の成果（ $k$ ）への道具性（ $I_{jk}$ ）の関数であり、それらもまた乗算的な相互作用をするものと考えられる。

$$V_j = f_i \left[ \sum_{k=1}^n (V_k I_{jk}) \right] \quad (j = 1 \cdots n)$$

$$F_i = f_i \left[ \sum_{j=1}^N (E_{ij} V_j) \right] \quad (i = n + 1 \cdots n)$$

**未来への感情的態度の動機づけの意味** Van Calsterら（1987）は、未来への感情的態度という概念を、EIVモデルにおける「成果の誘意性の代数的総和」を反映するものとしてとらえた。すなわち、希望職業が未決定の青年期の個人においては、学校での勉強をうまくこなすことは、近・遠未来における多くの目標にとって道具的であるが、実際にはそれらの目標群の多くはあまり特定化されていないと考えられる。そこで、彼らは、被験者に自身の目標をつくらせたり、彼らにそうしたリストを提示するのではなく、SD法による時間的尺度（Lens, 1975）によって、彼らの個人的未来に対する一般的な感情的態度を測定し、この態度得点を未来の目標群が持つ誘意性の代数的総和を反映するものとしてとらえたのである。

そして、高校で勉強することの未来の目標群への道具性の認知を測定し、それと未来への感情的態度との、勉強へのモチベーションに対する有意な交互作用を確認している。すなわち、未来に対してポジティブな態度を示し、勉強の未来目標群への道具性を高く認知する個人は、未来に対してネガティブな態度を示す個人や、ポジティブな態度を示すが道具性の認知が低い個人に比して、有意に強く動機づけられ、有意に高い試験結果を得ていた。このことから彼らは、未来の目標群が明確ではない青年期においては、未来への感情的態度という時間的展望の変数が、未来の目標群の持つ誘意性の代数的総和として捉えらえるとしている。彼らの結果からは、動機づけ的未来展望において、現在の活動がその道具性と未来に対する感情的態度の相互作用を通じて、モチベーション

を持つようになる過程が示唆される。

**自己効力理論** ただし、EIV理論の枠組みに基づいた彼らの研究においては「活動の遂行期待」に関する観点が欠け、「高校でいい成績をとっていくこと」を遂行すること自体に対する期待の影響性は考慮されていない。

しかし、Bandura（1982）の自己効力（self-efficacy）の理論では、自分がある行動をうまく実行できると思う主観的確率（効力期待 efficacy expectancy）と、特定の行動が特定の結果に結びつくことについての主観的確率（結果期待 outcome expectancy）とは、それぞれ異なった働きを持つために、区別することが重要であるとされている（FIGURE.1）。前者は主体的・適応的な人間の能

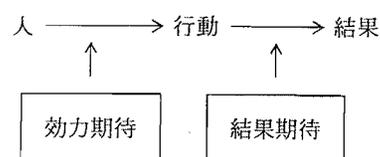


FIGURE.1 効力期待と結果期待の関係

力、すなわち対処能力をとらえるものであるのに対し、後者は環境のリスクを反映した性格を有する。そして、この独立した効力期待と結果期待には、交互作用効果が仮定され（Bandura, 1982）、両方の期待が高ければ、環境を御しやすいと信じ、確実に自信に満ちた行動がとれるのに対し、どちらの期待も低い場合には意気消沈する（Devins, Binik, Gorman, Dattel, McCloskey, Oscar & Briggs, 1982）とされる。

一方、先述のVroomのEIV理論における期待の概念は、ある活動と、ある成果（結果）の関連性に関する期待であり、効力期待のような活動に対する自己能力発現に対する信頼感、少なくとも明示的にはとらえられてはいない。しかし、不確実的な環境において人が適応的な行動を目指すなかで、その基底には能動的な人間の効力期待の発現に対する自己確信が作用し、適応的な行動を支えていくものと考えられる（井尻, 1983）。それ

ゆえ、喚起されるモチベーションのメカニズムを明らかにするためには、Bandura が指摘するように、個人の能力発現に関わる期待と、活動—結果に関する期待の2つの要素を分離し、両方の期待を考慮に入れる必要がある。

そこで以下では、未来展望の期待的側面を考慮する上で、EIV モデルにおける期待の成分を、効力期待にあたる「活動の遂行期待」と結果期待に相当する「活動の未来の目標群に対する道具性」とに分離して検討する。そして、これらの期待と未来への感情的態度という3つの認知に基づいて、動機づけ的未来展望を再考する。

### 未来展望に関するシステムモデル

**未来展望の構成と統制感** これまで述べてきたように、現在のモチベーションを引き出す有力な要因として、現在の活動それ自体に対する遂行期待や、その活動未来の目標群への道具性認知を挙げることができる。動機づけ的未来展望の構成には、これらの要因が関わっていることが推測される。

これらの期待は、いずれも具体的な対象と結びついた特殊期待 (specific expectancy) にあてはまるものであり、より上位の一般化された期待、すなわち一般的期待 (general expectancy) と関連する。一般的期待を扱う概念としては、Rotter (1966) の Locus of Control 概念がよく知られるが、これは「自分が望んだとき (その気になったとき) に、自分の欲する結果が得られる可能性についての期待 (樋口・鎌原・大塚, 1983)」と定義される個人の統制感 (perceived control) に関する一般的期待である。

先行研究においては、一般的統制感の高い「内的統制型 (internal control)」の個人と、その低い「外的統制型 (external control)」の個人との間の時間的展望の様相の相違が報告されている。たとえば、Platt & Eisenman (1968) や、Thayer, Gorman, Wessman, Schmeidler & Manucci (1975) は、内的統制の個人が外的統制の個

人に比して、extension, evaluation などの未来展望の各側面において、よりポジティブな傾向を示すとしており、Wolf & Savickas (1985) は、時間的展望と原因帰属の正準相関分析によって、適応的な時間的展望と内的統制者にみられる帰属様式 (達成成功を努力・能力に、達成失敗を努力属足へ帰属) の関連性を確認している。また、杉山 (未発表) は、未来に起こることが予想されるイベント (future events) を測定し、内的統制者は外的統制者に比して、未来に推測するポジティブなイベントの数が多く、また、その未来の成功に対して持つ道具性を高く評価しているという結果を得ている。

このように、個人の一般的統制感が未来展望の期待的側面と深く関連していることが示唆されたため、杉山 (1993; 1994c; 投稿中) は、「現在に影響を与えるような未来展望は、個人の抱く一般的な統制感を基礎にして形成される」とする、一般的統制感と未来展望の行動調整効果に関するモデル (「動機づけ的未来展望に関する統制感モデル」) を構成した (FIGURE.2)。それによれば、個人が高い一般的統制感を獲得した場合には、それに基づいて、動機づけ的未来展望が形成され、それによって未来の成果獲得を目指して現在の行動が調整される。一方、一般的統制感が未獲得であったり、低いものであったために統制不可能事態で喪失してしまった場合には、動機づけ的未来展望を形成することができず、それゆえに未来的時間属望によって現在の行動が調整されない。

このモデルに基づき、杉山 (投稿中) では、未来展望の行動調整効果が一般的統制感の個人差

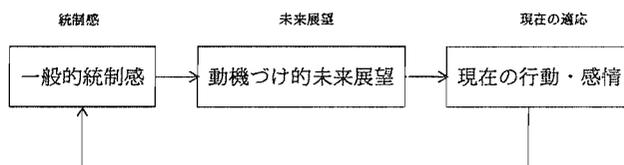


FIGURE.2 未来展望に関する統制感モデル

によって異なるという仮説のもと、大学生 168 人を対象に、一般的統制感の高・低群における時間的展望体験尺度（白井，1994）がアパシー傾向に及ぼす影響性を、それぞれの群において重回帰分析を行うことによって比較検討した。Locus of Control 尺度によって分類した 2 群の比較を行った結果、内的統制群では、未来への認知を測定する尺度がアパシー傾向に対して有意な抑制的影響を示したのに対して、外的統制群ではそうした傾向がみられなかった。この結果は、先述のモデルにおける未来展望の行動調整効果と一般的統制感との関連性を示唆するものといえるであろう。

**システムとしての未来展望** ただし、この研究においては、未来展望は時間的展望体験尺度によって期待・感情の両面を複合したものと測定されており、動機づけ的未来展望の構造や機能は明らかにされていない。それでは、動機づけ的未来展望はどのような構造を成し、どのような機能を通じて現在の活動に影響を与えるのであろうか。以下では青年期の未来展望に関して、そのメカニズムに関する考察を行う。

青年期は、個人が自らの意志に基づいて、自身の価値観に沿った人生を設計し始める時期といえる。Lewin (1942) は、時間的展望の発達の一つの側面として、現実と非現実の分化という現象をあげているが、理想と現実の混合されたものであった児童期の未来展望は、青年期になり自身の人生目標が設定されるにつれて、手段-目的 (means-end) の構造が確立されていく。例えば「医者になる」という目標を達成するためには医師免許をとる必要があり、そのためには大学の医学の課程へ進学しなくてはならない。このように青年期には目標と、その達成のためにとるべき活動が明確に把握されるようになり、下位目標が、上位目標の達成のための道具的な価値を持つようになるのであり、それゆえ、青年期の未来展望の形成過程は、未来の成功を目指し、それに通ずる contingent path を構成していく過程としてとらえられる (注 4)。

そして、上述の未来展望における期待・価値的側面の動機づけの意味から考慮すると、この青年期における現在に影響を及ぼしうる未来展望には、「個々の活動の遂行期待」、「個々の活動の未来の目標群への道具性認知」、「未来に対する感情的態度」という 3 つの成分が影響する。しかし、EIV 理論や自己効力理論に見られるように、それらの側面は独立的に存在するというよりも、それぞれの側面の相互作用を通して形成され、機能していると考えられる。この点に関して南・光富(1990)は、未来展望が複数の成分から構成されるシステムの構成を成すとしており、そこから推測すると、青年期における動機づけ的未来展望は、FIGURE 3 に示されるように、上述の 3 つの成分が共応的に機能することで、現在の活動の選択的に動機づけ、それによって未来の目標群の達成を目指す 1 つの目標志向的なシステムであると考えられる。これを未来展望システム (future time perspective system) とする。

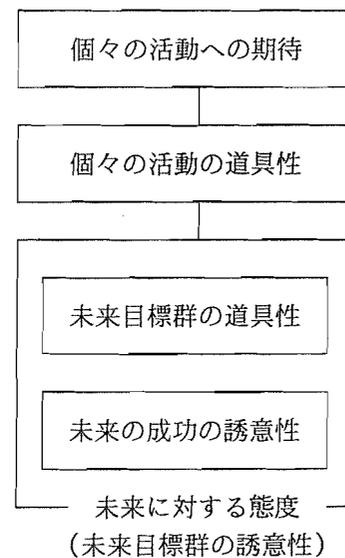


FIGURE 3 未来展望システムに関するモデル(1)

**未来展望システムと適応** 個人はそれぞれの時期において従事しうる活動を複数抱えている。そして、そうした複数の活動へのモチベーションにおいて未来に対する感情的態度と活動への期待がモチベーションに及ぼす影響性は、それらの

未来の目標群への道具性認知によって異なることになる。すなわち、それらの間に高い正の道具性を認知する場合（その活動を行うことが未来目標群の達成につながると考える）場合には、その活動は高く動機づけられる。それに対し、道具性認知が低い場合には、その行動への動機づけ効果は低い。未来展望がシステムとして確立された個人においては、このようなメカニズムによって、現在とりうる活動のうち、「未来のため」になる活動が選択的に増加し、そうではない利他的・衝動的な活動の相対的な割合が減少する。

一方、こうした未来展望システムの未構成や機能不全は、モチベーションの低下を通じて、不適応状態を導くと考えられる。都筑（1982）は現代青年にみられる「しらけ」といった心性が未来展望に密接に関係していることを指摘しているが、こうした心性は現在の活動の遂行期待や未来への道具性認知はあっても、自分の未来に対する価値を見いだせない（すなわち未来に対する感情的態度がネガティブである）といった状態にあると考えることができる。それゆえ、未来展望がシステムとして共応的に機能していない状態としてとらえられるであろう。また、先行の否定的出来事に対する内的・安定的帰属により、個々の活動への遂行期待を持たない場合は Hopelessness 理論（Abramson, Metalsky & Alloy, 1988）のメカニズムに対応する。この場合、この不完全な未来展

望は、Hopelessness 状態（抑うつの下位カテゴリーと位置づけられる絶望性抑うつを導く）を引き起こすであろう。

### 未来展望システムに関わる要因

未来展望システムとして仮定された上述のような過程において、いかなる先行要因が影響を及ぼすのであろうか。これまで説明した知覚された道具性や contingent path の概念からは、以下のような個人変数の影響が推測される。また、それらと統制感および未来展望システムとの位置づけは FIGURE.4 のようになる。

**extension** 時間的展望の発達の側面の一つは、extension の延長であり、Lewin (1951) は、時間的展望の発達について、年齢と共により遠い未来と過去が現在の行動に影響を及ぼすことを示唆している。ある程度までの未来展望の長さは、未来展望システム機能の必要条件となる。すなわち、extension が延長されることにより、未来の個人的目標群が個人の生活空間に組み込まれ、誘意性を持つことで、未来展望システムが機能するのである。もし、extension が適正なレベルまで延長されず、未来の目標群が個人の生活空間内に存在しないときには、未来展望システムはその機能を十分に果たすことはできないであろう。また一般に、時間・空間的に離れた対象の影響性はその距離の関数として減少していくということが

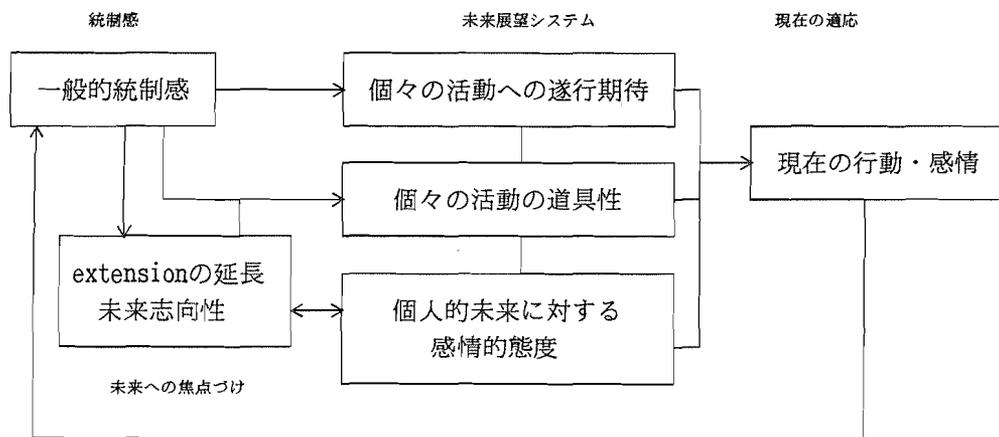


FIGURE.4 未来展望システムに関するモデル(2)

知られているが、未来展望の長い個人は、遠未来に対する彼ら自身の行動の意味を理解しやすく (Nuttin & Lens, 1984), さらに遠くの未来にしか達成しえない目標について、その遅延による目標の誘意性の減少が少ないことが確認されている (e.g. DeVolder & Lens, 1982)。このことから、一定範囲を越えて extension が延長されることは、未来展望システムの動機づけ的影響の強さに促進的に働くことが考えられる。

**未来志向性** 未来志向性は、意図的行為には必ず内包される (Eckensberger & Meacham, 1984) 傾性であり、未来の目的のために構成される未来展望システムに不可欠である。一方、過去志向は一時的には情動的な安定維持の機能も持つが、長期的な問題解決という視点からは生産的な役割を持つとはいえない。過去志向は、未来の目標群のアクセシビリティを低めることにより、未来展望システムの構成や機能に対して、長期的にはネガティブな影響性を持つであろう。実際、未来志向的な個人は目標をより近いものと知覚して、その準備に早めに着手するという周到的な計画を建てるということが確認されている (Halvari, 1991)。

**未来への焦点づけ** 未来展望の変数のうち、extension の延長や未来志向性の上昇は、このように未来展望システムの形成に対して促進的に働く。こうした過程は、日常生活において自己の未来を参照し、現在の行動を調整する傾向を促進する認知能力や動機づけと関わるものであり、いわば「未来へ焦点づける」過程としてとらえることができよう。

こうした過程もまた、個人の統制感の影響を受けていると考えられる。たとえば、extension の延長に関しては、5, 8, 11 学年生の自己責任と未来的時間展望の長さとの関連性を検討した Lessing (1968) が、彼らの自己責任性得点が未来展望の extension と対応を持ちながら、学年が上がるにつれて上昇していくことを見いだしており、このことは、未来展望の extension の発達における統制感の役割を示唆する。時間的志向性に関し

ても、Brannigan, Shahon, & Schaller (1992) が、外的統制の個人が内的統制の個人に比して、過去志向的な daydream を多く経験していることを示している。また、杉山 (1994c) は、中学生における過去・現在・未来に対する態度 (注5) と未来志向、過去志向の関連を検討し、その結果、過去・現在・未来に対する否定的な態度は、一般的統制感の高群においては未来志向性のみ有意な影響を及ぼしているが、低群においてはその他に過去志向性に有意な影響を及ぼしていることを見いだしている。これらの結果からは、未来展望システムの形成過程において、ストレスフルな状況に接したとき、統制感が高い場合には意識や行動が未来志向的になり、未来展望システムが賦活されるであろうが、統制感が低い場合には逃避としての過去志向を示すため、未来展望システムの構成が阻害されることが示唆される。

## 今後の課題

本稿では、期待理論に基づいて、個人の未来への展望が現在の活動へのモチベーションに影響を与える過程を検討し、未来展望の諸変数 (現在の活動の未来の目標群への道具性認知、未来に対する感情的態度、extension、未来志向性) をモチベーション的な文脈で再考した。

このモデルでは、EIV モデルや自己効力の知見を青年期の人生設計の過程に緩用している。一般に未来展望は、この時期において最も影響力を持つとされているが、それは、こうした現在と未来との手段一目的的な関係性に基づく動機づけの効果が、最も優勢に機能するためであると考えられることができる。しかし、幼児期や老年期といった他の人生時期においては、こうした機能が青年期に比して弱いだけなのであろうか。それとも構造的に異なるメカニズムが機能しているのであろうか。こうした各発達段階における未来展望の役割についての検討は今後の課題である。

## 脚注

- (1) この「動機づけ的未来展望」とは, Lessing (1972) が認知-動機づけ的未来展望, また, Nuttin & Lens (1985) がアクティブな未来展望としたものにはほぼ対応する。しかし, それらの概念定義は, 彼らのオリジナルな測定手法と不可分であると考えられたため, ここでは混乱を避けるために, それらの用語を使用しない。
- (2)  $T_S = T_{S1} + T_{S2} + \dots + T_{Sn} + \dots + T_{Sn}$   
 $T_{-f} = T_{-f1} + T_{-f2} + \dots + T_{-fn} + \dots + T_{-fn}$   
 $T_{Sn} = M_S \times P_{1Sn} \times I_{Sn},$   
 $P_{1Sn} = P_{1S1} \times P_{2S2} \times \dots \times P_{nSn}$   
 $T_{-fn} = M_{AF} \times P_{1fn} \times I_{fn},$   
 $P_{1fn} = P_{1f1} \times P_{2f2} \times \dots \times P_{nfn}$   
また,  $I_{Sn} = 1 - P_{1Sn}, I_{fn} = -(P_{1fn})$  であるので, したがって,  
$$T_{Sn} + T_{-fn} = (M_S - M_{AF}) \sum_{n=1}^N (P_{1Sn} \times I_{Sn})$$
- (3) Raynor は, future orientation という用語を明確に定義しておらず, path とほぼ同義に用いている (伊藤, 1982)。
- (4) 本稿では紙幅の都合で, 目標設定 (goal-setting) の過程については検討できなかった。しかし, Kanfer & Zeiss (1982) や次郎丸 (1987) が示すように, 統制感と要求水準や目標設定の間には密接な関係が存在する。この点については別の機会に論じたい。
- (5) 個人的過去・個人的現在・個人的未来それぞれの時間次元に対する態度を測定する項目を設定したが, 因子分析の結果, それらは時間次元ごとの因子を形成するのではなく, 時間次元を越えて, 過去・現在・未来を通じた態度として一つの因子を形成した。

## 参考文献

水口禮治 1975 動機づけにおける期待理論

- 期待理論の比較考察— 八代学院大学紀要, 8, 1-16.
- 伊藤義美 1982 達成動機づけに関する研究(Ⅲ) —未来志向 future orientation における長期通路の効果— 名古屋大学教養部紀要(B), 26, 151-172.
- Lens, W. 1986 Future time perspective: A cognitive-motivational concept. In Brown, D.R., & Veroff, J. (Eds.) *Frontiers of motivational psychology*. Berlin: Springer-Verlag, 173-190.
- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press/LEA.

## 引用文献

- Atkinson, J.W. 1964 *An introduction to motivation*. Princeton: Van Nostrand.
- Abramson, L.Y., Metalsky, G.I., & Alloy, L.B. 1988 The hopelessness theory of depression: Does the research test the theory? In L.Y, Abramson(Ed.) *Social cognition and clinical psychology: A synthesis*. New York: Guilford.
- Bandura, A. 1982 Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, 37, 122-147.
- Barndt, R.J., & Johnson, D.M. 1955 Time orientation in delinquents. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 343-345.
- Brannigan, G.G., Shahon, A, J., & Schaller, J,A. 1992 Locus of control and time orientation in daydreaming: implications for therapy. *Journal of Genetic Psychology*, 153, 3, 359-361.
- De Volder, M., & Lens, W. 1982 Academic achievement and future time perspective as a cognitive-motivational concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 556-571.
- Devins, G.M., Binik, Y.M., Gorman, P.,

- Dattel, M., Mc Closkey, B., Oscar, G., & Briggs, J. 1982 Perceived self-efficacy, outcome expectancies, and negative mood states in end-stage renal disease. *Journal of Abnormal Psychology*, 91, 241-244.
- Eckensberger, L.H., & Meacham, J.A. 1984 Action theory, control and motivation: A symposium. *Human Development*, 27, 163-210.
- 樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作 1983 児童の学業達成に関する原因帰属モデルの検討 教育心理学研究, 31, 18-27.
- 表谷真知子 1994 青年の時間的展望と個人的目標についての調査 1993年度立教大学心理学科卒業論文(未公刊).
- 井尻昭夫 1982 仕事行動と自己効力ーバンドラの所説を中心としてー 神戸大学経済学論集, 14, 4.
- Isaacson, R.L., & Raynor, J.O. 1966 Achievement-related motivations and perceived instrumentality of grades to future success. Unpublished paper, University of Michigan. (伊藤, 1982による)
- 伊藤義美 1982 達成動機づけに関する研究(Ⅲ)ー未来志向 future orientation における長期通路と短期通路の効果ー 名古屋大学教養部紀要(B), 26, 151-172.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 小宮山要 1973 青年の時間的展望に関する研究 青年心理学研究会(編)「わが国における青年心理学の発展」金子書房
- la Roche, A.N., & Frankel, A. 1986 Time perspective and health. *Health Education Research*, 1 (2), 139-142.
- Lessing, E.E. 1968 Demographic, developmental, and personality correlates of length of future time perspective(FTP). *Journal of Personality*, 38, 183-201.
- Lessing, E.E. 1972 Extension of personal future time perspective, age, and life satisfaction of children and adolescents. *Developmental Psychology*, 6, 457-468.
- Lewin, K. 1942 *Time perspective and morale*. New York: Houghton Mifflin. (末永俊郎訳 1954 時間的展望とモラル「社会的葛藤の解決」東京創元社)
- Lewin, K. 1948 *Resolving social conflicts*. New York: Harper.
- Lewin K. 1951 *Field theory and social science*. New York: Harper. (猪股佐登留訳 「社会科学における場の理論」誠信書房)
- Mischel, W., & Metzner, R. 1962 Preference for delayed reward as a function of age intelligence, and length of delayed interval. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, 425-431.
- 南博文・光富隆 1990 青年期における未来展望と有能感の関係に関する研究 広島大学教育学部紀要, 38, 241-247.
- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press/LEA.
- Platt, J.J., & Eisenman, R. 1968 Internal-external control of reinforcement, time perspective, adjustment, and anxiety. *Journal of Genetic Psychology*, 79, 121-128.
- Raynor, J.O. 1968 Achievement motivation, grades, and instrumentality. Paper presented at the meetings of the American Psychological Association, San Francisco, September. (伊藤, 1982による)
- Raynor, J.O. 1970 Relationship between achievement-related motives, future orientation and academic performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 28-33.
- Raynor, J.O., Atkinson, J.W., & Brown, M.

- 1974 Subjective aspects of achievement motivation immediately before an examination. In J.W. Atkinson & J.O. Raynor (Eds.) *Motivation and achievement*. Washington D.C. : Winston. 155-171.
- Robertson, S.A. 1978 Some personality correlates of time competence, temporal extension and temporal evaluation. *Perceptual and Motor Skills*, **46**, 743-750
- Rokeach, M., & Bonier, R. 1960 Time perspective, dogmatism, and anxiety. In M. Rokeach (Ed.) *The open and closed mind*. New York : Basic Books, 336-375.
- Rotter, J.B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**.
- 白井利明 1985 児童期から青年期にかけての未来展望の発達 大阪教育大学紀要 (第IV部門), **34**, 61-70.
- 白井利明 1989 現代青年の時間的展望の構造(1) —大学生と専門学校生を対象に—大阪教育大学紀要 (第IV部門), **38**, 21-28.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, **65**, 54-60.
- 杉山成 1993 時間的展望とコントロール 水口禮治(編)「適応の社会心理学的心理療法 —コントロールトレーニングの理論と技法—」駿河台出版社.
- 杉山成 1994a 未来に対する態度と目標対象の関連. 日本心理学会第58回大会発表論文集, 344.
- 杉山成 1994b 時間次元における諸自己像の関連性と自我同一性レベル. 教育心理学研究, **42**, 209-215.
- 杉山成 1994c 中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性. 教育心理学研究, **42**, 415-420.
- 杉山成 1995 時間次元における諸自己像の関連からみた時間的展望. 心理学研究(印刷中).
- 杉山成 投稿中 青年における一般的統制感と時間的展望の関連 —アパシー傾向との関連—.
- 杉山成 未発表 一般的統制感と未来イベントの関連性.
- Teahan, J.E. 1958 Future time perspective, optimism, and academic achievement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **57**, 379-380.
- Thayer, S., Gorman, B.S., Wessman, A.E., Schmeidler, G., & Mannucci, E.G. 1975 The relationship between locus of control and temporal experience. *Journal of Genetic Psychology*, **126**, 275-279.
- 都筑学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, **30**, 73-86.
- 都筑学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40-48.
- Van Calster, K. 1979 The affective time attitude towards the personal past, present, and future. In Nuttin, J., & Lens, W. (Eds.) *Future time perspective and motivation : Theory and research method*. Leuven : Leuven University Press/LEA.
- Van Calster, K., Lens, W., & Nuttin, J. 1987 Affective attitude toward the personal future: Impact on motivation in high school boys. *American Journal of Psychology*, **100**, 1-13.
- Vroom, V.H. 1964 *Work and Motivation*. John Wiley and Sons. (坂下昭宣他訳 1982 「仕事とモチベーション」白桃書房)
- Wolf, F.M., & Savickas, M.L. 1985 Time perspective and causal attributions for achievement. *Journal of Educational Psychology*, **77** (4), 471-480.

#### 謝 辞

本稿の作成にあたり、ご指導いただきました立教大学文学部 水口禮治教授に深謝いたします。